

## 第 13 回富山大学大学開放推進懇話会

**日時** 平成 24 年 2 月 15 日（水）10:00 ～ 12:00

**場所** 富山大学事務局 5F 大会議室

**主催** 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門

**趣旨** 富山大学大学開放推進懇話会要項に基づき、学外有識者から意見を聴き、多様化・高度化する学習状況や地域ニーズへ対応した効果的な学習を提供し、大学開放事業をより円滑に推進するとともに、その実施状況について評価を受けるため開催する。

### 出席者

#### 委 員

- 平野 富佐（富山県教育委員会生涯学習・文化財室長）  
加藤 敏久（富山県民生涯学習カレッジ学長）  
金井 進（富山県生涯学習団体協議会会長）  
北村 廣明（日本放送協会富山放送局局長）  
西田 良正（富山市市民学習センター所長）  
和田 悟（北日本放送（株）常務取締役 放送本部長）  
板倉 均（（株）北日本新聞社代表取締役副社長編集局長）  
伊藤 敏幸（富山県立小杉高等学校校長）

### 富山大学

- 遠藤 俊郎（富山大学長）  
丹羽 昇（理事・副学長 地域連携推進機構長）  
竹内 章（地域連携推進機構 生涯学習部門長）  
藤田公仁子（地域連携推進機構 生涯学習部門 副部門長）  
仲嶺 政光（地域連携推進機構 生涯学習部門 准教授）  
渡邊 弘樹（研究振興部長）  
近藤 達也（研究振興部付）  
中田由紀子（研究振興部 社会貢献グループ地域連携チーム 主査）  
藤井 秀春（研究振興部 社会貢献グループ地域連携チーム 主任）  
平野美沙希（研究振興部 社会貢献グループ地域連携チーム）  
坊田 康平（研究振興部 社会貢献グループ地域連携チーム）

## 1. 開会の辞

富山大学地域連携推進機構の生涯学習部門長竹内章より、以下のあいさつがあった。

富山大学の平成 23 年度大学開放事業についてご報告するので率直に評価していただきたい。

本学は総合大学として、8 学部すべてがオープン・クラスや公開講座などの大学開放事業に取り組んでいる。昨年は東日本大震災が発生し、近い将来、西日本大震災も危惧され、まさに地域の力が試されている。大学は、従来のオーソドックスな大学開放の枠組みを超え、地域防災や地域ジャーナリズムの立ち上げなども考えるような状況に至っている。地域の生涯学習の新しい仕組みを切り開いていく上で、富山大学にどのような役割が求められているか、忌憚のない意見や提言をいただきたい。

## 2. 学長あいさつ

遠藤俊郎学長より、以下のあいさつがあった。

私は昨年 4 月から学長を務めている。富山大学の社会地域連携、大学開放事業は一つのポイントになっていると考える。現在、国立大学はさまざまな課題を抱えているが、一番は日本を担う世界に発信できる人材をどう育成するかで、大学の基礎教育、教養教育の見直しが非常に問われている。大学は若者に対してもっと基礎教育をする一方、社会に対してはメッセージを出さなければいけない。一方で、大学の運営費交付金は年々 1% ずつ減らされている。そういう中で、大学は何をどこまでできるのかが問い直されている。社会で求められるものに大学が応えていく責務と、それに貢献する役割を大事にしていかなければいけない。

富山大学は 3 大学が統合して 6 年がたった。国立大学は 86 大学あるが、その中で最大の改革をしたのは富山大学だと思う。ただ、大学開放推進懇話会は旧富山大学でスタートしているので、杉谷、高岡のメッセージが十分入っていない可能性がある。三つのキャンパスが一緒になったメリットを発揮し、また地域や県、産業、教育委員会などと協力して、よりメッセージ性を高め、まとまった形のメッセージを出していきたい。大学ができることは何か、皆さまと協力できることは何かを議論していただきたい。

## 3. 出席者の紹介・資料確認

## 4. 座長選出

富山県民生涯学習カレッジ学長の加藤委員が座長に選出され、あいさつがあった。

## 5. 議題

(1) 平成 23 年度生涯学習部門事業・活動報告について

(2) 富山大学大学開放の在り方についての平成 23 年度評価と提言について

(3) その他

竹内生涯学習部門長より、平成 23 年度の大学開放事業の活動報告があり、公開講座・オープンクラスの講座数、受講者数、講座科目について説明があった。

今年度の特徴については、藤田副部門長より説明があった。

また、仲嶺政光准教授より、公開講座・オープンクラスの受講生アンケートの結果と自由記述について報告があった。

最後に竹内生涯学習部門長より、小杉高校で実施された「校外学修事後研修」、富山大学で実施された「富山駅前サテライト公開講座」、富山大学・金沢大学・福井大学・北陸先端科学技術大学院大学が開催した「北陸4大学連携まちなかセミナー」「2011 富山大学コラボフェスタ」「ワークショップ 災害が起きたらどうなる？」等のイベント、平成23年度出前講義の実施状況について報告があった。

## 6. 閉会の辞

丹羽昇地域連携推進機構長より、以下の謝辞があった。

本日いただいたご意見を当部門の中で検討し、反映させていきたいので、今後ともご指導をお願いしたい。外側からのワンストップステーションはパンフレットに電話番号が書いてあるので、何でも言っていただきたい。できるだけ迅速に対応する。

## 意見交換

### (1) 平成23年度生涯学習部門事業・活動報告について

(西田委員) 開放講座は平成元年から始まり、年々講座数、募集人員、受講者数が増えて充実されてきた。これは地域の人的資源を十分に活用できるというメリットもあると思う。平成22年と平成23年を比較すると、講座数が二つ増え、募集人員が300名余り多くなっている。これは、講座が多くなっただけでなく、今までの講座や新しい講座の募集人員が増えたのか。

(大学側：藤田) 平成22年度は調理実習が入っている講座を少し募集人員を減らして実施したところ、もう少し指導できるということで、平成23年度に少し募集人数を増やした。ほかにも同様に流動的に対応している。微妙な組み合わせの中で増加している。できる限り努力していくということで、人数とシフトの関係を講師の先生方と相談しながら進めており、今、作業段階に入っている。

(西田委員) 講座も、新しいものを設けたり、今までの講座をなくしているのだろう。

(大学側：藤田) 募集がゼロの講座については、先生方が次年度も開講したいというときには難しいと申し上げる。講師の先生や受講者とコミュニケーションを密に取り、アンケートだけでなく、直に会いながらいろいろなニーズに応える形で双方向関係を築くことに取り組んで2年目である。

(西田委員) 私たち市民学習センターも、募集人員に比して受講される方が少ない講座や、逆に募集人員の2倍以上の講座が幾つかある。毎年見直しをするが、難しい面もある。アンケートだけでは分からない。いろいろ苦勞すると思う。

(大学側：藤田) 同じ悩みを抱えている。「家庭菜園」はとても人気の講座で、抽選している。受講者を一人増やすには家庭菜園の区画を一つ確保しなければいけないが、それでも一人増やしてほしいと願うのに2年かかった。だから、数字の面では少しずつである。



(加藤座長) そのほかの機関で開設している講座や受講者数の動きはどうか。北日本新聞社ではどういう状況か。

(板倉委員) 長くカルチャー講座を開いているが、受講生は伸びていない。講座によっては非常に少人数のところもあれば、たくさんのところもある。やはり内容によりけりだと思う。

大学内で長く続けてきている公開講座を含めて、これから続けていくための最大の評価は人数なのか、アンケートの声なのか。「ヘルン文庫のお宝発見」という講座があったが、これは少ないと思っていた。一般市民の方でヘルン文庫を研究しているグループがあるので、もっと売り出したらどうか。

県外から9人応募しているが、どういうことを求めているのか。

(大学側：藤田) ヘルン文庫の講座は内容面で聞きたいということで、八雲会など必要なところに広報をかけている。あとは、やはりこの先生でなければという形で先生に受講者が付いているところもあり、県外からも来ている。

これからの公開講座については、いかに市民に大学を開放してくかという観点もあるが、大学に親しんでいただき、社会人入学や大学院の方へ進んでいただくきっかけづくりもある。大学卒業の方が結構受講されている。富山大学は大学院もあるので、その後、継続的に学んでいくための一つのステップ、ツールともなっている。公開講座は、全国的な大学でもとてもいい効果になっているので、今後も取り組んでいきたい。

(大学側：遠藤) ご指摘のとおり、ヘルン文庫に関する富山大学の研究者チームの形が今まであいまいだった。そこで、今年度は新たに学術的な学内研究チームを人文学部を中心につくり、勉強会を開始した。そこと、民間でヘルン文庫に興味を持って活動されている方と、今さまざまな形で交流を始めている。また、マリ・クリスティーヌさんがこの公開講座に参加してくださるのは大きい。マリさんは関係者の方を、ご自身のコミュニケーションで全国的に呼んでいる。彼女のグループ、学内の研究グループ、富山の市民の3者を組み合わせて、ヘルン文庫を富山大学の財産として育てていきたいと強く思っている。今年の5月に県の文学館ができるが、そこにヘルンの富山大学の資料も出していく。皆さまのお力添えを得ながら富山の文化財の一つとして維持していきたい。

(加藤座長) 今後のいろいろな可能性を秘めているということか。

(大学側：遠藤) 県など皆さんのお力添えをいただいている。

先ほど板倉さんが、大学が公開講座をやっているときではないと私が言ったように言われたが、私はやるべきだと思っている。それは竹内さんが言われたのではないか。

(大学側：竹内) 基本的にはもっと行動しろ、座学で終わるなということだ。

(加藤座長) 人を呼んで講座を開いているだけではなくて、公共のネットワークづくりに積極的に行動しろという発言だったと思う。

(大学側：藤田) それは竹内先生が「コラボフェスタ 2011」の生涯学習部門シンポジウム講師の世古先生の発言を紹介したもので、同講師は金沢大学から NPO の方に移られた方で、柔軟に対応した形で動くべきだというご意見であったと思う。

(加藤座長) いろいろな角度から大学に対する期待が高まっていると思う。

(大学側：丹羽) 公開講座の継続の意義は、オープン・クラスの受講者アンケートにも見られるように、60 代、70 代の高齢者の割合が非常に高くなっている。超高齢社会になり、退職してからかなり長い時間を生きなければいけない。その場合、知的な欲求をどこで満たせばいいのか。ニーズが結構あると思う。今後はオープン・クラスにしろ、公開講座にしろ、多くの高齢者の方々が積極的に参加していただけたらと思っている。どのようなニーズを持っているのかを的確に把握し、それに合うようなものを提供していかなければいけないと思っている。今後とも積極的に進めていきたい。

(加藤座長) 今年度の事業について、ほかの委員の方々はどうか。

(金井委員) 資料 5 ページにあるが、杉谷キャンパスの 76 番で「4 月 1 日～配信」というのは通信教育のような形か。「修了していない」という備考書きがあるが、これはどういう形で終わっているのか。

二つ目は、オープン・クラスの受講登録状況で、11 ページに前期、14 ページに後期が出ているが、前年度の受講生が前期では減っていて、後期では若干増えているのは、前期・後期で受講生の層に違いがあったのか。同じような講座を開いていたと思うが、その辺の数字の違いはどのように受け止めているか。

もう一つは、出前講座で県外が何件かあるが、出前講座の情報はどんな形で発信しているのか。

あと、61 ページに生涯学習のオープンサロンの話が出ているが、これの受講、利用者は結構いるのか。ほかの大学では、受講を卒業した方々で一つの集まりを組織しているという動きがあると聞いたのだが、そのようなものは富山大学ではあるのか。それができれば、そこからまたいろいろなネットワークが生まれるのではないか。

(大学側：藤田) オープン・クラスについては、前期に受講された方たちが後期のプログラムに興味を持つので、前期と後期で別々に募集をかけているところもあるし、講座の内容もあるので、後期の方が多い、前期が多いという形では把握していない。ただ、オープン・クラスについては、この講座を聞きたい、これに興味があるという形でピンポイント的に受講されていることが相当あることは受け止めている。

修了者については、県民カレッジのように組織していることはない。

オープン・クラスについては 10 月からオープンしたが、今、徐々に広報している段階である。利用者は講義の始まる前の 9 月の受講生が行き場所がないので、休憩所に使っている現況だ。生涯学習相談も行っているのですが、分からないことを講師の先生に聞きに行っているのかということからもスタートする。本当に基本的な悩み事の相談から、今後はこういう資格を取りたい

という相談もある。今一つ一つ積み上げているような状況であり、まず場所の存在を知っていただくことがスタートという状況である。

出前は部局の方でやっているの、今年度の出前はこれだけあったというデータの情報がこちらに届いているだけだ。

(大学側：竹内) 出前は各学部のホームページなどで掲示をしているのが大部分だが、一般的には直接各学部に申し込みがあるので、私どもの部門ではなかなか把握しづらい。

(大学側：遠藤) 出前講義に関しては、例えば入試の説明などが入ったときに、これが出前講義というクエスチョンのところがある。その区切りが非常にあいまいなところがあり、竹内先生が苦勞されている。出前講義は個別で単独でコミュニケーションで依頼されて出ていくものもあるし、それをどこまでまとめられるのかという課題は持っている。

がんプロは、対象者が医療者絡みの専門職を持っている人たちに対するものだ。これは北陸の医系の大学と一緒に作っているプランニングで、そのメッセージを伝えようというものだ。ずっと続いてメッセージを出しているの、修了していないということだ。ここにこれが入るのは少し異質だ。

## (2) 富山大学大学開放の在り方についての平成 23 年度評価と提言について

(平野委員) 事前に資料を送っていただいて見て、「これだけか」と感じた。把握できないところで富山大学は本当に身を削っている。県、教育委員会としてもお世話になっているし、学校もたくさんお世話になっている。個別に見ると、子どもたちから直接電話やメールで相談事を聞いてくれている富山大学の学生 5 名ほどが、今日で最後だと昨夜あいさつした。先生方だけでなく、学生の力も含めて大学が持っている人的、知的な財産をそれぞれの得意分野を生かして開かれた大学に日ごろから活動しているのに、これだけしか載っていないと思った。しかし、表紙を見て、地域連携推進機構の部門のフィルターを通すとこういう集約になるのかと納得した。

今日、追加の資料を見ると、従来にないたくさんのコーディネート力が必要な新たな取り組みも進んでいる。情報収集とコーディネート力がないとこれからの発信ができないと思う。

個々の説明を聞くと、例えば 2 ページの平成元年からの 20 年間の実績は、生涯学習県と言われている本県の明らかに大きな支えとなっている。富山大学は推進役として着実に成果が表れていると思っている。

6 ページ、7 ページに年齢、男女の性別による特徴が書いてある。男性は 70 代が多く、女性はもう少し若いときにピークがあるが、ここ数年変わらない傾向の分析である。県民カレッジの受講生も似たような傾向がある。しかも、リピーターが多くてなかなか広がらない。これをどう分析して、これから減りはしない高齢者に対するニーズを把握していくのか。これはいろいろな講座を開設するときの一つの共通課題だと思うが、富山大学では今後どのように分析されるのか。

座長をしている学長がいるのに、県民カレッジの方でもキャンパスという、こういう教材の情報の中に富山大学の公開講座も入れている。この公開講座を見て選ぶのは少ないのかもしれないが、どの程度関連があるのか。私が十分把握していないだけかもしれないが、公開講座を



受けたら、カレッジで単位として連携講座という位置付けにしているのでお互いに情報提供をし、相乗効果が出ればいいと思っている。

カレッジで学遊ネットという情報を提供するネットを持っているが、そこにいろいろな講座の情報を載せている。今年度から公民館のいろいろな企画もウェブサイトを立て上げて、全県的に情報を集約して発信している。その中に講師の先生の情報を入れているものがある。指導者として約 6300 人ほど登録しているが、その中に県内の 4 大学の先生方は約 110 名、そのうち富山大学の先生方は調査した 12 月初旬では 24 名ということだが、本当はもっとたくさんいる。先生方の情報をもっと広く出してもいいのではないか。情報発信の仕方もあるいろいろな方法がある。

(加藤座長) 講師の方々のいろいろな情報はカレッジの方でも講師情報という欄を設けて、講師の方の了解を得て紹介している。

和田委員は北日本放送の立場で、いかがか。

(和田委員) 私の立場からということはないが、公開講座はいろいろな分野をたくさんやっていて、定員いっぱいの講座も結構たくさんあり、一生懸命やっているというのが第一印象である。ただ、大学としては公開講座やオープン・クラスを維持していくには負担はかなり大きいのか。

(大学側：丹羽) 個別の先生からすると、日常的に自分の講座、あるいは研究が本分としてある。そのほか、富山大学の知的な財産を外に流して社会貢献をするという役割も持っている。先生方にはご理解をいただきながら、過度に負担がかかり不満が出てこない範囲内でどうにかこれだけのものが提供できていると思っている。実態はどうか。

(大学側：藤田) 国立大学は社会貢献という一つの柱があるが、その言葉を出すより、先生の研究を市民の皆さんに紹介していただけないかということをつきかきしている。

また、となみ政経塾や経営者大学などは、私どもで講師を紹介するだけではなく、パッケージとしてプログラムを組んで市民に提供している。3 回とか 5 回とかバランスを取りながら楽しんでいただくようなパッケージもつくり、いろいろな形で先生方とコミュニケーションを密に取りながら協力していただいている。私たちのセクションからすれば、「ご理解をいただいている」という言葉で今のところは進んでいる。一方で、外部の講師も来ているので、その辺の費用面の負担も抱えている。

(和田委員) 意欲的に取り組んでいる先生方もいるということだが、地域住民の意欲に応えていくのは非常に有意義で大事なことだと思う。一方で、大学としては大学開放推進のメリットをどのように求めていくのかということになると、もう一つ違った面での取り組みが必要ではないか。先ほど藤田先生から、こういう講座を通して次のステップにつながっていくという話があったが、受講者数だけでなく、そういう人がどれだけそういう分野につながったか。もう少し具体的な形を考えていくことも必要ではないか。

(大学側：藤田) 実際のところ大学としてということもあるが、こちらの公開講座とオープン・ク

ラスの受講者は市民学習センターや北日本新聞社、放送大学などいろいろなところで受講している方が多い。その後を富山大学という一つのツールで把握するのは難しい面がある。

(和田委員) 講座で全然重なっていない部分がたくさんある。例えば北日本新聞でカレッジはいろいろ開講しているが、民間と競合している部分もある。大学ではもう一味、目的があったらいいと思う。では、どうすればいいのかは私も分からない。

(大学側：丹羽) 答えになるかどうか分からないが、国立大学法人は税金で運営されているので、強化すべき機能の一つとして社会へ貢献することが明確に打ち出されている。その意味で、本学の機能強化プランがある。これは遠藤学長が今年度作ったものである。その中の社会貢献として、生涯学習だけでなく産学連携部門、地域医療・保健支援部門などのいろいろな側面で大学は自分の持っている教育研究の財産を地域に還元していく。これは地域に存在する一つの主体としての責務であるにとらえている。官業が民業を圧迫する側面もあるかもしれないが、お互いの目的はそれぞれ違うと思うので連携、協調しながらやっていけるのではないかなと思っています。

(和田委員) この意義を疑問に思っているわけではない。ただ、せっかく大学の講座であるから、学習意欲のある方に応えていくこともあるが、より地域の活性化などいろいろなことになると、どういうところに人と金を使うのかという中で考えていく点もあるのではないかな。

(大学側：遠藤) 和田さんの言われるとおりだと思う。私の個人的な思いだが、大学人も立場として学長になったらみんな地域貢献をしようと言うが、私は4～5年前まで大学の教授として手術などに携わっていた立場からいうと、日中の一つ講座を持ってくださいと言われたら躊躇するので、名前を書くのはやめておこうかと思った。それが現実的な姿だと思う。医療は特殊な状況ではあるが。大学で何のメリットがあるかと言われると、例えば聞いていてくれた若い人が、富山大学のあの先生が面白いから入学試験を受けてみようかと思うとすると、受験生が増えて授業料が少し増えるという経済的なことがあるかもしれないが、本当の意味で何がメリットなのかをよく考えながらプロジェクトをつくっていかなければいけない。最終的には、講義させていただくことによって、あるいはいろいろなコミュニケーションができる形で、われわれが知識を一方的に出すのではなく、自分自身をプログレスしなければいけないときに別の考え方を教えてもらうなど、感性の部分では本当の意味で何かあるはずだ。それは講義をする側の姿勢だと思っている。

余談だが、私は金沢の中学校の立志会に呼ばれて、「よく遊べ、よく学べ」というタイトルで話をした。話を終わって一人の中学生に質問された。「私はバレー部のキャプテンをやって、部活がとても忙しくて遊ぶ時間がない。そういう人はどうすればいいのか」と言われた。私はバレー部のクラブ活動は遊びの延長かと思っていて、「君の遊びは何か」と聞くと、「友達としゃべったり、別の遊び」と言った。そのとき私は、今の中学生にとって部活は学びなのかと一瞬戸惑った。それは一例だが、医療の講演で質問を受けたときに新しい発見があるかもしれない。

(大学側：藤田) 生涯学習の教育の観点からいうと、大学でなければできないことだと思う。大学



を知っていただくことで、次の学びのコース、プログラムのツールとして使っていただく。富山大学に限らず、学芸員や栄養士の資格を取ったり、経営学修士を取るという形でリタイアした方たちがチャレンジしていく。公開講座で学んだことをきっかけに、もう少し詳しく専門的に知りたいたと、その大学だけではなく通信教育や放送大学などで自分の学びの時間に合わせて資格取得にかかわっていく形で使われている。本当は富山大学の公開講座で富山大学のメリットが出てくるようになればいいのだが、受講者たちの幅広い学ぶ意欲があるのでその中の一つの手助けになれば、大学を開放していくことで貢献できる形になるのではないかな。

(北村委員) この1年、富山大学の社会への露出度がかなり上がったのではないかと考えている。私の社会へのかかわりはそれほど多くないが、その原因として目に付くところが三つある。一つは遠藤学長だ。いろいろなところに行って情報発信している。二つ目は竹内先生である。大震災以来、県内のいろいろなところでの情報発信が地域社会に対して露出度がかなり上がったのではないかな。もう一つは、総曲輪の商店街の中を学生がちょろちょろ動いていることだ。学生の活動は別個として、そういうもので富山大学が何をを目指しているのかが少しずつ地域社会の中で見えてくると考えている。社会へのアプローチはそういうことなのではないかなと思う。

冒頭に竹内先生が地域防災、地域ジャーナリズムということを言われた。これは非常に興味深く、聞いてみたいと思った。広告塔ではないが、地域への露出を学長なり竹内先生が先兵としてやることにより地域社会への貢献度が上がってくるのではないかな。それによって社会が見えてくると感じる。それが結果的に公開講座の中身にも影響してくると思う。

そのときに思うのが、「大学開放」という言葉だ。開いて、来なければ来て、来てほしければ行くというスタンスだ。これはかなり昔の言葉だと思う。大学地域連携推進機構で地域貢献と声高に言っているのであれば、「大学地域貢献」と素直に言った方がいいのではないかな。その方が今の世の中にはダイレクトに伝わってくるような気がする。

もう一つよく分からないのは、地域連携推進機構の生涯学習部門である。私どもは富山大学といろいろな形で講座をやっていて来週も言語講座を予定しているが、例えば大学で学生たちにこういう講座をやったらどうだろうかというときにどこにコンタクトを取ればいいのか分からなかった。大学側は地域連携という形でこういう部門をつくっているが、私どもがコンタクトしたくても分からない。私どもの組織だけではなく、これからいろいろなところから出てくると思う。もう少し外からアプローチしやすい体制をつくっていただくとありがたい。

(大学側：丹羽) おっしゃるとおり、大学は敷居が高いという思いが県民の皆さん方にあるようだ。それをできるだけ低くしたいということで、学長が就任されてから、大学の外側から入ってくる者についてワンストップステーションでいきたいというのが地域連携推進機構だ。もし仮にいろいろな話があったとしても、ここへつなげていただければしかるべきところにきちんと話がつながるようにしたいと考えているが、なかなかうまくいっていないようだ。例えば言語表現という講義が教養教育であり、それにはアナウンサーやいろいろな方々から従来からご協力を願っている。これは教養教育の部門だが、外側からの人からするとそういうことは分からない。だから、ただそれを入れていただければ迅速に対応できるようにしたい。今までいろいろな要望等がそれぞれの部局へ直接行かないとつながらない状態だったが、ワンストップで地域連携推進機構、社会貢献のところに話を持っていいただければ、それを迅速にこなせるような体制を

つくりたい。至らないところが多々あると思うが、改善していきたいと思っている。

(大学側：近藤) 地域連携推進機構のパンフレットをお手元に配っているが、その中に総合窓口として私ども社会貢献グループという名前の電話番号とアドレスを載せている。その上の方に「地域連携推進機構は地域に開かれた大学の総合窓口です。どのような相談にも応じるので、大学に相談したいけれど、どこに相談してよいか分からないときは、お気軽にご連絡ください」と書いている。学内的になかなか周知が至っていないが、基本的には大学の総合窓口としていきたいと思っているので、ぜひ活用していただきたい。

(加藤座長) 伊藤委員、高等学校の立場からいかがか。

(伊藤委員) 教育と研究、医学部ならば治療という普段の中で、これほど多くの社会貢献をしていることを知らなかった。また、公開講座の意味とオープン・クラスの意味も初めて知った。今の私の理解が一般の方々の理解レベルではないか。大学のこれだけの社会貢献に比例して一般の方々はそれほどあまり理解していないのではないか。もっとPRしていけばいいと思う。これは生涯学習部門だけのまとめなので、私どもの学校だけに限れば、本校の創校の父は南原繁先生なので、南原繁研究会の中に入っている富山大学の先生に本校の生徒向けに講演に来ていただいた。また、健康に関する講演会も医学部の先生に本校に来ていただいた。だから、生涯学習部門以外のことも含めればどれほど社会貢献をしているか、どれほど出かけているか分からないほどのことをしていると思う。

本校は総合学科ということで選択することをキーワードにしているので、いろいろなところで、いろいろな授業やいろいろなことを選んでいくのだが、本校は校外学修で、今年度は11名の生徒が富山大学の校外学修を選んで、いろいろなオープン・クラスに参加している。レポートや発表も含めて35週で1単位を与える。去年、校外学習の総括の発表会が富山大学であったときにある生徒が発表し、そこに出席された担当の先生から、非常に手厳しい批評をいただいた。私は「そこまで言わなくてもいいのではないか。かわいそうだな」という思いがあったが、後日学校で発表会のときにその生徒は、「富山大学の発表会では、高校生として批評されたのではなくて、一受講生として批評していただいた」と言った。私はその言葉に感動した。その生徒は今3年生で、今度の富山大学の個別2次試験を目指して勉強しているが、生徒にとっては勉強もそうだし、先生からの批評もそうだし、同じ富山大学の学生とともに勉強している面でいろいろ吸収するものがあつた。そういう面では、私どもとしてはありがたい制度を利用させていただいていると思っている。これは小杉高校だけではなく、ほかの高校にも少し広がればと思う。出前講座でたくさん的高校が富山大学に応募していると思うが、もう一步広めて校外学修という制度も広がればというのが私の印象である。

(加藤座長) 最後に言い足りないところがあれば伺いたい。

(大学側：遠藤) 加藤さん自身の意見を。

(加藤座長) 広報の仕方ということで、冒頭、竹内先生から悩んでいるという話があつたが、カレッ



ジも同様だ。私も 60 代だが、カレッジに来られる人の様子を見ていると、必ずしも自発的に「あれを勉強したいから」ということばかりではない。ニーズは掘り起こしてあげなければいけないところがある。それには、こういう勉強の機会があるという情報はもちろんだが、声掛けが最後の決め手になる。大学のアンケートでも、大学からのダイレクトメールが一番効いている。電子媒体、紙媒体、ありとあらゆる手段で広報されているが、いざ受講に行くかどうかの最後のきっかけは人からの声である。大学の方でこういう講座をしていることを先生方が口づてにカレッジに来られる方に知らせる機会をつくれば、つまり、この講座を受けた後は大学にもっと進んだ講座があるという言い方ができるのではないかという気がしていた。最後はやはり人のネットワークが決め手になる。

そこをどうやってうまく連携を取っていくかが、これからのわれわれと大学との連携の在り方の一つかもしれない。そうすることによって県民の皆さんがさらに豊かな生涯学習社会の恩恵にあずかれると思う。こういう連携の場はますます必要になってくるし、連携の在り方そのものの本質論はこれから大事になってくる。ぜひお互いに知恵を絞り合って、本県の生涯学習社会の基盤整備のために努力していきたい。

### (3) その他

(大学側：遠藤) 北村さんから提案があった大学開放推進懇話会の「開放」は変えたい。

(大学側：竹内) 学長もそういうご意見だが、何か問題があるか。

(大学側：遠藤) 「地域貢献推進」は少しはまらない感じがする。

(大学側：竹内) では、名称を変える方向で検討したいが、皆さんのご意見も伺いたい。

(大学側：藤田) 生涯学習教育研究センターが、今、生涯学習部門にそのままの形で改組されたので、今度は社会貢献、地域貢献ということになると、教育セクションというよりは、全体機構全体で対応の形の方に当てはまるのではないかと考えている。

(大学側：竹内) 学長の方もそういう意味合いで言っていると思う。こちらで検討していくということではよろしいか。名称の件はそういう取り扱いにする。